よめっちゃ

2017.9.27(No.27)
庄内町立図書館

文学講座

『銀河鉄道の夜』……ジョバンニが口にした「みんなの本当の幸い」を求め続けた賢治。
その全容を、賢治自身と賢治文学が辿った軌跡を追い、明らかにする――

講師は詩人であり、戯作家であり、宮沢賢治研究者の新庄市在住の近江正人氏。
その詩情を湛えるアツイ言葉も必聴です。

お申し込み受付中

図書館カレンダー

★開館時間　　平日　午前 9：00～午後 7：00
　　土日　午前 9：00～午後 5：00
※11 月より 平日の開館時間が 午後 6：00 まで と

10月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

■ ⇒休館日

おはなしらんど ★ たのしいおはなし会

☆日時：10/18（水）・10 時～
☆会場：庄内町立図書館１階ホール
お申し込み不要。お気軽にご参加ください♪

お問い合わせ　図書館・内藤秀因水彩画記念館
43－3039
分館　56－3308
図書館 HP→http://www.town.shonai.lg.jp/library/

庄内町 内藤秀因水彩画記念館

Shonai Town Shuin Naito Museum of Watercolor

展示のごあんない

さとうまりこ 絵本原画展

2017.10.14 →11.19

展示概要

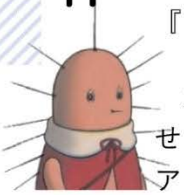
本展では鶴岡市出身の絵本作家である、さとうまりこさんの手がけた作品を絵本原画を中心に約 40 点ご紹介します。

会場：内藤秀因水彩画記念館第２展示室
入館料:無料　休館日:毎週月曜日、11 月 3 日(金・祝)

プロフィール

さとう まりこ（佐藤　茉莉子）
1985 年鶴岡市生まれ。東北芸術工科大学情報デザイン学科卒。在学中からグラフィックデザイナーの上條喬久氏に師事し、絵本の制作をはじめる。
2010 年、『とげとげ』（文・内田麟太郎／童心社）でデビュー。

作品紹介



『とげとげ』
（内田 麟太郎/文，佐藤 茉莉子/絵，童心社）
主人公のとげとげは、体にトゲが生えているせいでみんなにいじめられます。ある日、ヤマアラシのトムが颯爽と助けにきてくれて…。

『ポッタとポッテ ランプのあかり』
（さとう まりこ／作，童心社）
お母さんにたのまれて街へランプのあかりを買いに行った、ふたごのリスのポッタとポッテ。あかりのありかを知っているモグラに、こっそり付いて行きます。

さとうまりこさんよりコメント

庄内町 内藤秀因水彩画記念館
Shonai Town Shuin Naito Museum of Watercolor

図書館コラボ企画

山形県出身 × 作家

記念館で作品を展示する**さとうまりこさん**は山形県鶴岡市出身。ということで、同じく山形県に生まれ、現代に活躍する方々の著作の中から、職員オススメをご紹介します。

『食堂かたつむり』 小川　糸／著 （ポプラ社）

小川糸さんは山形市出身。小説家、作詞、翻訳家、音楽制作ユニット Fairlife のメンバーと、マルチに活躍されています。

代表作『食堂かたつむり』は、恋人から全財産を持ち逃げされ、ショックから声を失った主人公が、故郷に戻り、１日１組限定のメニューのない小さな食堂を開くというお話。主人公の作る料理は幸せな奇跡を呼ぶと評判になり、主人公自身も料理することで、いつしか失意から立ち直り、母親との確執も解消されていきます。

食べることは命をいただくということ。生きること。そして命を繋いでいくことだと感じました。

おいしい料理をいただいたたようなほっこりとした幸せを味わってみませんか。

『考える人生相談』 加藤典洋／著 （筑摩書房）

これはあくまでも個人的な印象なのですが、フランス文学の研究者は、評論やエッセイなどについても詩的な文章をお書きになる方が多い気がするのです。

この本の著者、山形市出身の加藤典洋氏も仏文学を研究された方で、現在に至るまで日本文化に関する数々を著書しています。

その中でも特に読みやすいのがこの本！生活の中の素朴な疑問から、政治や学術へのちょっと難しそうな論考まで、読者から投稿されるさまざまな「人生相談」に加藤氏が答えていきます。

加藤氏の答えに共通しているのは、すべて美しくて優しい言葉で記されていること。1つの回答が1つの短編小説のように、読む人の心に物語を感じさせます。いともたやすく私たちの日常と文学を溶け合わせる文章に、きっと虜になるはずです！

『大滝十二郎―生涯とその時代』 阿部博行・川田信夫／著 （評伝『大滝十二郎』刊行会）

みなさんは庄内町出身の「大滝十二郎」をご存知でしょうか。大滝氏は、昭和８年、庄内町狩川地区荒鍋に生まれ、余目高等学校教員として教鞭をとった人物です。その間、「魯迅」「宮沢賢治」「柳田国男」等作品の読書会に参加し、真壁仁主宰の『地下水』の同人誌、新聞2社のコラムの連載執筆をし、昭和40年代から平成初期に県内の文壇、史誌編纂等で活躍した郷土の文人の１人です。没後、多くの蔵書や執筆資料等が東北公益文化大学に寄贈されています。

この「大滝十二郎」の本を刊行したのが、大滝氏と同じ高校教諭の後輩として親交のあった阿部博行氏と川田信夫氏です。阿部博行氏は、鶴岡市出身の市史編纂委員であり、これまで『小倉金之助』『土門拳』『石原莞爾』『黒崎幸吉』等の著書があります。また、川田信夫氏は、新潟出身で「地下水」の同人であり、詩集『パンドラの箱』を出版されています。

『きょうはそらにまるいつき』 荒井良二／著（偕成社）

まだ図書館員になりたてだったその昔、酒田市で荒井さんと編集者の小野明さんの座談会がありました。今ではビッグネーム過ぎて遠い存在となってしまった荒井さんは、その時、文化センターの小さな小さな研修室で、小野さんと、尽きることのない「絵本愛」を語っておられました。私にとって、絵本に対する想いが大きく変わるきっかけとなった、忘れえぬ荒井さんとの出会いです。

今回ご紹介した作品は、ふと見上げた空に満月を見つけたときのうれしさ、日常の尊さを描いた絵本。ページを追うたびに、しっとりとした夜の時間が流れます。

絵本は、子どものためのものであると同時に、すべての人のものです。疲れたら、迷ったら、つまずいたら、会いたかったら、楽しみたかったら、夢見たかったら、心の声を聞きたかったら…あなたも１冊の絵本をどうぞ。

『夏目漱石、読んじゃえば？』 奥泉　光／著 （河出書房新社）

文学作品というと、高級で難解なイメージをもたれがちですが、実は長く読み継がれた作品ほど、自由な読み方・楽しみ方ができたりします。本書は、小説のさまざまな読み方を、筆者に手を引かれながら一緒に試し、楽しむ、そんな愉快な読書案内本です。ガイド役は三川町出身の作家であり、フルート奏者、そして夏目漱石ファンでもある奥泉光さん。

タイトルの通り、扱われているのは暗くて小難しい日本近代文学の代名詞、のような漱石作品ですが、奥泉さんの示す読みは、文学作品全般に応用できるものばかりです。老若男女問わず気軽にお楽しみいただける本ですが、とくに ①読書＝「書かれている意味内容を理解し、ストーリーを追うこと」？ ②文学や美術などの作品を前に「この作品／作家は分からない」と思うことがある ③読書感想文を書くのに毎年大苦戦！ という方々にイチオシです。古今東西の作品たちともっと親しくなれますし、きっとなにか作品を読んでみたい気持ちになりますよ。